

【一般演題3】 第14席

「『黄帝内經』における邪の諸相」

京都 横山 浩之

中国伝統医学の思考法の特徴は、陰陽・三才・五行等を背景とした抽象的な言辞を用いて、天地の運行および心身の現象を説明する点にある。よって当然のことながら人体の疾病構造・治癒機転の説明にも概ねこれらの理論が適応される。両者の説明における、とりわけ重要な観念は“邪”である。

“邪”は固定的なものではなく、人体の正気との相対的な関係において、はじめて位置づけが可能な観念である。正気が衰退すると“邪”が人体に侵入し発病する。『黄帝内經』における主要な治療手段は鍼灸法であり、その基本的な運用法である“補瀉”は、正気と邪気の拮抗関係の上に成り立つ技術である。しかし“邪”は抽象的な言辞であり、その範疇は各々の文脈の上から判断せざるを得ない。よって鍼灸の臨牀上、しばしば問題となる“補瀉”的な方法についても、その対象となる“邪”的な範疇が明確に提示されなければ、曖昧なままに終始するおそれがある。

よって今回は、『黄帝内經』における“邪”的なすべての用例を検討し、中国伝統医学の病理機序・治癒機転の理解の一助としたい。